複雑化する日本の安全保障

Vol.58

変化の兆し

ヨーロッパの政治に変化が生じています。

二度の世界大戦という惨禍に見舞われた教訓から、この地域では第二次世界大戦後に統合への模索が始まりました。このことは「ヴェルサイユ体制について、欧州の経済復興に資する手立てが何一つなされていない」とケインズが批判したことを、30年余り経ってようやく反省した成果と言えるでしょう。石炭と鉄鋼という軍備拡張に不可欠な産業について、欧州域内の6カ国が参加して共同市場を構成することにしたのが1951年です。フランスと西ドイツ、そしてイタリアとベネルクス3国が原加盟国でした。とりわけ両次の大戦で激突したドイツとフランスとが参加する形で結成したことが重要な一歩であったことは言うまでもありません。

このシステム（ECSC）は、欧州原子力共同体と欧州経済共同体（EEC）と併せて欧州連合（EU）へと発展し、英国という大駒の離脱はあったものの、現在は27カ国が加盟し欧州を新しい政治状況に導いています。ただし、その経緯は淡々としたものではありません。以前本稿でも書いたように、19世紀後半からドイツという存在が欧州の課題となっていきます。「ドイツをいかに統一し、統一したドイツをいかに欧州のシステムに組み込むか」というジョル教授が示したテーマです。そして二度にわたってシステムに組み込むことに失敗したことが、外からの勢力の介入を許すことにつながりました。米国とロシアです。

このことは欧州にとって致命的でした。第一次世界大戦では、米国の参戦とその物量の支援がなければ、戦局はドイツにとって有利だったでしょう。そして第二次世界大戦では、2000万人以上といわれる人的損害に苦しみながら戦い続けたソ連軍の存在が戦局を決定的に左右しました。つまり45年以降欧州は東西に位置する二つの大国の存在と影響力とに配慮することが求められるようになってしまったのです。その構造はNATOとワルシャワ条約機構という形で現れました。欧州が分断されたのです。

一括りに言えば、冷戦と呼ばれる時代は米ソが45年にドイツに勝利した時の軍隊の配置をそのまま残したものです。米軍が展開したエリアは、19世紀以来の国々の形が大体保持されていたので、東西に分断されたドイツを除けば安定したものでした。問題はソ連が支配した地域です。20世紀が始まったときにこの地域にあったオーストリア・ハンガリー帝国とオスマン・トルコ帝国は解体され、民族の坩堝（るつぼ）と化した地域を柔軟性のない共産主義が支配したのです。91年から解体が始まり2006年に完全に消滅したユーゴスラビアという国は「一つの国でありながら二つの文字を使い、三つの宗教が鼎立（ていりつ）し、四つの言語が使われ、五つの民族が共存し、六つの共和国から成り、七つの国と国境を接する」といわれたまことに複雑な構成でした。

「ハプスブルグ帝国を崩壊させるのはご自由ですが、これは他民族を統治するモデル国家であり、一度壊したら二度と元に戻ることはないでしょう。後には混乱が残るだけです」

ウィーンを占領したナポレオンに対して、彼の外務大臣だったタレーランが送った手紙にある言葉です。彼の予言した混乱は、ソ連が占領したことで一時的に先延ばしにされました。共産党の支配による圧制という有無を言わさぬ秩序が成立したからです。ですからソ連が崩壊しワルシャワ条約機構が解体したことによって、タレーランの予言の顛末を百数十年後に見ることとなったのです。

第二次世界大戦が終わり、ソ連が資本主義の圧迫に対して防衛体制を築くために民族の色々な動きを東側陣営という形で統制したことや、国連憲章という枠組みで既存の主権国家の存在が尊重されたことから、東側陣営の解体が直ちにタレーランの予言した「混乱」に突入することにはなりませんでした。むしろ東西対決が終わったことにより、欧州をもう一度一つのものとしようという考えも、一時期とはいえ生まれたのです。87年にソ連のゴルバチョフ書記長が「欧州共通の家」という考え方を提案しています。ロシアもメンバーとして加わる大きな欧州という考え方は、2020年には欧州が天然ガスで40%に近い量をロシアに依存したことから考えても魅力的なものでした。ウクライナ侵攻の影響によりこうした動きは頓挫していますが、そもそも92年に起こったチェコとスロバキアの分離のように、冷戦構造のタガが外れたことによる大きな変化のリスクというものを見逃すことはできません。タレーランが恐れた「混乱」は始まったばかりかもしれないのです。

欧州が身構えているのはプーチンのウクライナ侵攻の展開だけではありません。1期目で欧州の安全保障に冷淡だったトランプが大統領となった場合に何が起こるのか。安倍とメルケルは去り、マクロンは追い詰められ、スナクの退場は避けられないような状況で、ドイツのショルツとイタリアのメローニに米国を欧州に関与させ続けることができるのだろうか。この厳しい問いかけへの答えがどのようなものになるか、その答えを知るにはもう少し時間がかかります。

議会の支持を取り付けることに苦しんだ結果、バイデン政権の支援が遅れたために、ウクライナではロシア軍が攻勢に出てきました。米国の支援が得られない欧州にはウクライナを支える力はないということを示す出来事でした。ドイツ問題の扱いに苦しんだ欧州が招き入れざるを得なかった域外の二つの大国が欧州の将来を決めようとしています。

西 正典
Masanori Nishi

1978年東京大学卒業、防衛庁に入庁。那覇防衛施設局長、内閣官房遺棄化学兵器処理対策室長などを経て2013年防衛事務次官。2015年退官。現在ボストンコンサルティンググループシニアアドバイザー、トランス・パシフィック・グループ会長 (https://www.transpacificgp.com/)。